

黄色いナマズ



写真T2-1-1 博物館に持ち込まれた黄色いピワコオオナマズ。全長約80cm。琵琶湖博物館のトンネル水槽に展示されている(撮影:松田征也)

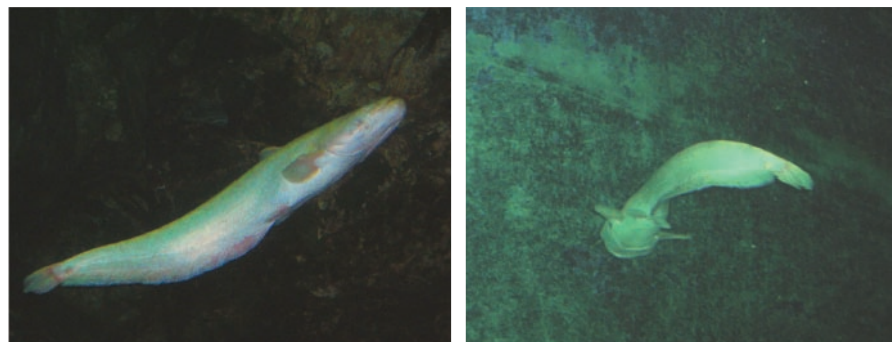
2006年、琵琶湖博物館で体が黄色く目の瞳孔が赤く見えるピワコオオナマズ、ならびにナマズ(マナマズ)が展示された。マスコミでは「金色のナマズ」とか、「黄金ナマズ」として大いに話題になった。これらは現在も展示されている。

さて、ピワコオオナマズ、ナマズとも、通常の個体は体色が黒いのだが、これらに黄色い個体がなぜ出るのだろうか。実は、これらの黄色い個体は、黒い色素(メラニン色素)を合成するのに関わるチロシナーゼという酵素が欠乏しているか、またはこの酵素の活性が低いために、メラニン色素を欠いているからである。その発現は、劣性遺伝、あるいは突然変異による。ところで、こうした個体、あるいは現象(症状)は、一般にアルビノ(albino)と呼ばれ、これはラテン語の“albus”(白い)から来ている。アルビノ個体

の特徴は、先にも述べたように、黒色素をもたないから眼底の血管の色が透けて見えるため、瞳孔が赤くみえることである。また、アルビノ個体の体色は、通常、黄色味を帯びている。

アルビノは、ナマズ類に限らず、哺乳類、鳥類、両生・爬虫類、魚類など動物界に広く認められる。しかし、アルビノの動物は、視力が弱いと俊敏に動けなかったり、体色がめだつため外敵に発見されやすいため、自然界での生存率はきわめて低いのが普通である。

では、ナマズ類ではなぜアルビノ個体がしばしば発見されるのだろうか。ナマズの場合、嗅覚で餌をとっているから視力の弱さは問題とならない。また、彼らの主な活動時間帯は夜間であるため、外敵にも襲われにくい。そのためナマズ類ではアルビノ個体が比較的生き残り易いと考えられる。



写真T-2-1-2 トンネル水槽を遊泳するピワコオオナマズ。普段は水槽の底にじっとしているが、運がよければ泳ぎ回っているシーンを見ることができる



写真T-2-1-3 黄色いナマズ。全長約40cm。琵琶湖博物館のディスカバリールームに展示されている

琵琶湖には、ピワコオオナマズ、ナマズ以外にイトコナマズがすんでいる。これらのナマズ類のうちどの種でアルビノの出現率が高いのだろうか?過去30年間ほどのアルビノ個体の出現状況を見ると、実は、イトコナマズでの出現率ももっとも高い。また、その琵琶湖での出現状況を見ると、特に南湖に多いようだ。ピワコオオナマズのアルビノ個体は、10年に1個体程度の割合で獲れている。ふつうのナマズの場合は、2006年にまとまって2個体が博物館に持ち込まれたが、琵琶湖周辺では、過去にはほとんど記録がなかったことなので、やや驚きである。

さて、琵琶湖では、古くから漁師の間でベ

ンテンナマズ(=弁天鯰)と呼ばれてきたナマズがいる。これは、出現割合から見て、その多くはイトコナマズのアルビノであろう。地元漁師さんたちは、ベンテンナマズが獲れると竹生鳥(宝蔵寺本堂)に祀られているベンテンさま(弁財天)のお使いとして、すぐさま逃がしていたと

言われる。その絵は江戸時代後期に彦根藩士・藤井重啓によって著された『湖中産物図證』に描かれているから、古くから人びとの注目を集めていたと思われる。人びとが通常と異なった体色(白、黄)をした動物に対し、その希少性や美しさから、神様のお使いなどとして崇めることはよくみられるが、琵琶湖にすむ黄色いナマズに対しても、そうした扱いがなされてきたものであろう。そんな畏れ多い黄色いナマズを展示している博物館とは、実に因果な商売である。

(琵琶湖博物館 前畑 政善)